様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月６日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010　～2012
課題番号：22520227
研究課題名（和文）　シェイクスピアの哲学的思想の近代初期における系譜学的考察
研究課題名（英文）　A Study on the Shakespeare’s Thought from the Viewpoint of Philosophical Genealogy of the Modernity

研究代表者
高田康成　（TAKADA YASUNARI）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：10116056

研究成果の概要（和文）：
本研究は、シェイクスピアの詩と演劇作品が切り開こうとして新たな世界を近代世界へ向けての営為と措定し、それにまつわる諸問題を近代哲学の課題として捉えることにより、シェイクスピアの思想のかたちを素描しようとする試みである。シェイクスピア作品を貫く近代的モーメントを「宇宙・世界像の転換」、「自然観の転換」、「精神世界の開拓」として、それぞれについて、イギリス 16－17 世紀を代表する思想家Ｆ・ベーコン、Ｔ・ホッブズ、Ｊ・ロックとの関連において考察し、シェイクスピア作品の哲学的全体像を示唆した。

研究成果の概要（英文）：
This study is an attempt to sketch a configuration of philosophical world that can be read in Shakespeare’s works. The underlying assumptions are that Shakespeare’s works were written in an effort to open up a vista to the modern world, and that problems arising in such an effort are shared by modern philosophers, such as Francis Bacon, Thomas Hobbes, and John Lock. By consulting these philosophers in reference to the modern moments, such as revolution of cosmic principles, conversion of natural perspective, and cultivation of mental world, which cut across Shakespeare’s works as vital axes, a way is suggested to bring to the fore a philosophical configuration of Shakespeare’s world-picture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：シェイクスピア、近代、哲学、世俗化、受容

１．研究開始当初の背景
シェイクスピアに関する哲学的考察の試みは、国内ではいわゆる「哲史文」が混交していた明治・大正期には可能であったものの、第二次世界大戦後は、たとえば中野好夫氏の『シェイクスピアの面白さ』に典型を見るように、哲学的考察が入り込む場が学問的にはなかった。さらに、学術の専門化と細分化が進むなか、学際的流行が進行しているにもかかわらず、あまり見られなかった。海外では、19 世紀初頭のドイツ観念論以来、哲学的と悲劇はほぼ重なり合うかたちで捉えられた。それは、英国では、戦前に一世を風靡したＡ・Ｃ・ブラッドレーに引き継がれ、戦後の実存主義の流行に始まるフランス系の思想の流れのなかで論じられるところであった。近年でも、政治哲学（アラン・ブルーム）をはじめとして、Ｓ・カヴェッルとかＡ・Ｄ・ナタルなどの犀利な研究がおこなわれている。
　それらの研究は、シェイクスピアの芸術的営為が近代の哲学が切り開いていった地平と部分的に密接な関係があったことを明かすものであり、その意味で、シェイクスピアの思想は真剣に考察の対象になるということを示したわけで、その意味は大きい。
　しかし、シェイクスピアを近代の哲学との関係で論じることには、別の視点もありうる。すなわち、シェイクスピア作品の全体像との関係において、近代の哲学的視点とのすり合わせ乃至比較が、どのように役立つかという問題設定である。

２．研究の目的
本研究は、これに先立つ研究「シェイクスピアの近代的受容に関する表象文化論的考察」の成果をもとに、シェイクスピアの作品に窺うことができる近代初期哲学の主要素を素描することを通じて、シェイクスピア作品の全体像の形なり、全体の方向性を探ろうとする試みであった。シェイクスピア研究は、グローバルな仕方で細分化が極端に進み、もはやシェイクスピア作品の全体像などということを考えることさえ困難な状況にいたってしまった。しかし、シェイクスピアが今なお（世界的な意味での）「我々」に訴えかけてくるのは、「近代」とその延長戦にある「ポスト・モダン」と呼ばれる時代が前提とする諸価値をシェイクスピアの作品が、その萌芽として留めているからに他ならない。本研究は、彼と同時代あるいは直後の哲学的思想を手掛かりにして、「近代」を前提としたシェイクスピアの作品世界の形と方向性を見定めようとするものである。

２．研究の方法
　シェイクスピア作品を貫く「近代的モーメント」としては、大雑把に見て、「世界像の転換」、「自然観の転換」、そして「精神世界の開拓」の３者がまず挙げられねばならない。
　「世界像の転換」の下には、マクロコスムとミクロコスムの照応を中心にした古代・中世的な固定的パースペクティヴから、マクロコスムの幻影化、ミクロコスムの固体化、そして究極的には個の無根拠性を問うような次元への変容が見られる。
　「自然観の転換」の下には、天使的な永遠の相と繋がった「贖われうる」自然から、そのような超越性を欠いた自然、自然の再生に範をえた再生史観、そして自己保身のみを基調とした無秩序な欲望としての自然、へと至る放物線が用意されている。
　「精神世界の開拓」の下には、神という絶対的超越者を前にした精神のかたちから、一次元下がった亡霊等を前にした精神のかたち、ある共同体を成立させる理念を前にした精神のかたち、そしてそれらに懐疑を抱く精神のかたち、人為による想像・創造からなる精神のかたち、などが提示される。
　上記の３者につき、近代を用意した哲学者であるフランシスコ・ベーコン、トマス・ホッブズ、そしてジョン・ロックを比較対照項として立て、それぞれ「偶像破壊」、「自然状態」、「精神・認識主体」といった中心概念を巡って考察することにした。

３．研究成果
シェイクスピア作品を貫く「近代的モーメント」とは、「世界像の転換」、「自然観の転換」、そして「精神世界の開拓」の三局面から確認きる。
○「世界像の転換」は主にフランシス・ベーコンの「偶像破壊」を基調とした経験論的な視点との対照において、認識論、政体論、学問論、の３側面から考察した。
　認識論的側面：ベーコンの思想は、伝統的権威によって古代・中世より継承されてきた諸観念を、経験的観測と実践的・功利的思考により批判した。その伝統破壊的な特色は、『トロイラスとクレシダ』や『アテネのタイモン』等に際立ったかたちで見られる。この認識は、かつて一世を風靡した所謂「エリザベス朝的宇宙・世界像」（ティリヤード）に言われた固定的調和的宇宙像に裏打ちされた世界観を打ち破る。ただし、ベーコンの場合は、近代の自然科学的な認識に向かっていくものであり、『嵐』に窺えるように、魔術・想像力の世界を色濃く残したシェイクスピアとは一線を画する。
　政体論的側面
ベーコンの政体論は、『ニューアトランティス』に見られるように、共和政的なものではなく、根本的にある種の超越的「啓示」に基

づく君主政体的なものである。それに対して、シェイクスピアに見られる政体論は、『コリオレイナス』と『リチャード二世』にそれぞれ見られるように、共和制と君主制の双方に等しく批判的である。シェイクスピアには、ベーコンにあるような「啓示」に対するこだわりが見られない。

学問論的側面

詩人にして劇作家であるシェイクスピアと基本的に散文思想家であったベーコンを比較することにまず無理があるとはいえ、「学術」arts に対する両者の態度はかなり異なる。当然ではあるが、シェイクスピアはベーコンほど学術・学問にたいする思い入れはない。これは、魔術と科学が錯綜する時代とはいえ、歴然としていて、この問題は、「精神世界の開拓」のそれに深く関係する。

○自然観の転換」は、主にトマス・ホッブズの「自然状態」を核とした思想との対照において、「保身欲求」と「裸の自然」２側面から考察した。

「自己保身」: ホッブズの思想に窺うことができる近代的契機は、利己的保身の欲求、その欲求を合理的に共通の利益へと変換する装置としての君主国家、そしてそれを保証する権限の委譲にかかわる「契約」であると見ることができる。「利己的保身の欲求」は、言うまでもなくシェイクスピア作品のいたるところに偏在し、さまざまなドラマを作りだす。しかし、それらは反転して共通の安全保障へと変換することなく、したがってホッブズの創案するような君主国家へと至ることはない。このように合理的契機が見出されないことは、否定的ながらシェイクスピア理解には重要だろう。すでに研究書の古典となって久しい J・F ダンビーの「自然観」は、ホッブズを視野に入れた『リア王』研究として一世を風靡したが、その意味で、われわれは慎重であらねばならない。

「裸の自然」: ホッブズにあっては、いわば「裸の自然状態」の認識が、（近代）国家という、利己的保身の欲求が合理的共通の利益へと昇華・変換する装置へと変身する契機であった。その合理的な契機はシェイクスピアには見当たらないわけだが、「裸の自然状態」の認識は存在する。『リア王』の嵐の場面がすなわちそれである。認識は存在しながら、契機にはならなかったのは、その対象があくまで「王」であり、人間一般ではなかったからに違いない。シェイクスピアの作品世界は、その意味で多分に中世的な基本構造を留めていたことを忘れてはいけない。これに関連して、ホッブズの歴史認識は、ギリシア的普遍性を窺わせるツキジデスの『戦史』に目を向けていたのに対して、シェイクスピアの歴史認識は、主にリウィウス（ローマ史）とホリンシェッド（英国史）であったことを思い起こすべきである。

○「精神世界の開拓」は、主にジョン・ロックの「精神・認識主体」を核とした思想との対照において考察した。近代的な「精神」あるいは「認識主体」が、16 世紀から 17 世紀にかけて根本的な変容を遂げたことは、疑いえない。「個」の誕生を 12 世紀まで遡って見るべきだとする研究もあるが、「近代精神」となれば、やはり宗教改革とルネサンス的懐疑主義に裏打ちされた 16~17 世紀とならざるをえない。その宗教改革に典型的に表れるはずの、神という絶対的超越者を前にした精神のかたちは、まともな仕方では、シェイクスピアには稀にしか現れない。その次の次元における精神・認識主体のかたちは、ハムレットに代表される、亡霊との関係において、ほとんど十分に追及される。超越性がさらに一段さがった次元で、共同体を支える理念（ローマの共和理念）との関係における精神・認識主体の問題を扱ったのは『コリオレイナス』である。さらに世俗的な次元において、男女間の懐疑における精神のかたちを抉り出したのが『『冬物語』であり『オセロー』であることは言を俟たない。（このような近代的な「精神」（mind）の形成の問題はさらにロックとの関係で追及されねばならなかったが、残念ながら時間の関係で、十分遂行することができなかった。）

以上、シェイクスピアの作品世界の全体像の思想構造を、近代哲学の祖との対照を通じて、素描する試みを行った。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

(1) TAKADA, YASUNARI, Chaucer's Allergy, *Poetica*, no. 73, 55-65.査読あり

〔学会発表〕（計 7 件）

(1) TAKADA, YASUNARI, Haecceitas an Quidditas, Yale University, Association of Japanese Literary Society of America, 15 October 2010.

(2) TAKADA, YASUNARI, The Black Book as a Postmodern Black Ship, The American Academy of America (San Francisco), 21 November 2011.

(3) TAKADA, YASUNARI, La diffusion di Vergilio e Orazio, Centro di Studi sulla Fortuna dell'Antico (Sestri Levante), 16

March 2012.

(4) TAKADA, YASUNARI, How to Do with Self-Fashioning in the Post-Showa Era, Yonsei University Forum (Seoul), 8 June 2012.

(5) TAKADA, YASUNARI, Notes toward a Configuration of Postwar Japanese Philosophy, Advanced Institute for Humanities and Social Sciences, National Taiwan University, 2 September 2012.

(6) TAKADA, YASUNARI,Toward a Typology of Consolation, UNESCO Korea (Busan), 22 November 2012.

(7) TAKADA, YASUNARI, Valeria's Speechless Eloquence, SEDERI (Spanish-Portuguese Association for English Renaissance Studies (Huelva, Spain), 13 March, 2013.

〔図書〕（計１件）
(1) TAKADA, YASUNARI, *Translatio* and Difference: Western Classics in Modern Japan, *The Classics and National Cultures,* Oxford UP, 285-301.

６．研究組織
(1)研究代表者
高田康成（TAKADA, YASUNARI）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：10116056

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：